

Columbus' egg tumbling in the space

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/8392

宇宙に転がるコロンブスの卵

Columbus' egg tumbling in the space

金沢大学医学部小児科

佐藤 保

1992年はコロンブスが新大陸を発見してから500周年に当たり、世界各地で様々な記念行事が行われた。バルセロナでのオリンピック、セビリアでの万博開催もこれと無縁ではありえない。原型通りに復元されたサンタ・マリア号が、東洋はジパングの辺境、金沢港に寄港したが、子連れのパクニック風景でお祭り気分もいま一つ盛上らず、コロンブスのロマンとはほど遠い催し物であった。

1492年8月3日、旗艦サンタ・マリア号と2隻のカラペラ船、ニーニャ号、ピンタ号でスペインのバロス港を出発するまで、コロンブスは航海費の捻出に10年の歳月を費している。スペイン王国でラチが明かず、ポルトガルのジョアン二世を口説き、弟のバルトロメを、英、仏両国に送ってヘンリー七世、シャルル八世にも愁波をおくっている。これほどまでに彼を駆り立てたものは一体何であったのか。信仰厚いイサベラ女王に申し立てた「キリスト教の聖なる福音を世に広めるため」というのは無論建前にすぎない。航海成就の暁に自分の取分として女王に申し入れた条件をみると、その尊大さに啞然とする。即ち①世襲の太平洋提督に就任する。②発見した土地の副王兼総督となる。③土地から得られる貴金属や香辛料など王室の取分の10%を取得する。これでは一個人の身分で一国の王と対等な権利の要求に近い。彼の計算によれば、東廻りより早い西廻り航海で黄金の国ジパングやインディアに到り、莫大な富と名誉を獲得するのが究極の目的であった。そのためにはヨーロッパ列国の王も単なる手段にすぎなかったようである。不幸にもイサベラ女王の死によって彼の目算は水泡に帰し、失意のうちに生涯の幕を閉じている。死後も彼の遺体は再三にわたり移動させられており、そのせいかセビリアのカテドラルに安置されている棺には魂魄漂う異様な無気味さを感じられる。

ところでヨーロッパの歴史からみれば、コロンブスは新大陸の発見者として栄光の座にあるが、片や中南米の側からみれば「新大陸」など迷惑千万、コロンブスを逆発見した先住民が固有の文化を伝承し、楽園生活を営ん

でいたに違いない。黄金に飢えたスペイン人の侵入でその文明は破壊され、掠奪と殺戮のあげく奴隷として売られる破目になった。その混迷は正に現代まで続いており、西インド諸島や中南米各国の立場からは500周年を祝う気になど到底なれないだろう。事実メキシコでは、征服者コルテスは今日厄病神扱いされ、市民は自己のアイデンティティを征服以前の世界に求めている。さらに新世界アメリカの現況を俯瞰するに、自由と独立の旗印は色褪せ、往時世界に君臨した財力も失せ、今やメキシコ国境から雲霞の如く越境してくる集団移民を押し出すのに明け暮れている。まさに歴史の皮肉と嘆ずる外はない。

今日、世界の冷戦構造が崩壊し、各国が新しい秩序を模索している中であって、その反動からか宇宙への夢が膨らんでいる。毛利氏を組み入れたエンデバーチームが宇宙で様々の実験を行い、その実況が茶の間にテレビ中継された。人々は宇宙空間がすぐ手のとどく処にあると錯覚し、地上から楽園が消滅した分、宇宙への期待は広がるばかり、あたかも500年前の大航海時代の幕開けを彷彿とさせる。なるほど科学の粋を集めた宇宙船は、大西洋上のサンタ・マリア号より安全かもしれない。しかし今回宇宙に持ちこまれたニワトリの受精卵はついに孵化しなかったという。胎児の分化は上から下へと進行する原則があるが、無重力の世界では下剋上の無秩序が器官の正常な分化を妨げているかもしれない。コロンブスの卵はどうやら宇宙空間では立たないらしい。尤もこの逸話自体、後世の作り話といわれ、英語圏には「コロンブスの卵」という語彙は存在しないそうである。ところが現実に卵の意外性は人智の及ばぬ処で起こっている。彼の意図とは無関係にコロンブスはヨーロッパに梅毒と煙草を持ちこんでおり、今日のエイズもその伝を継ぐものとも考えられる。宇宙時代の到来という宣伝文句に浮かされたあげく、地上から持ちこんだ諸々の生物、塵芥がやがては天に向かって唾する結果にならない様、用心の上にも用心することが、コロンブス500周年の教える最も今日的な意義ではないだろうか。